

教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の
状況の点検及び評価報告書
(平成26年度事業分)

庄内町教育委員会

平成27年9月

1 点検及び評価制度の概要

この報告書は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第26条第1項の規定により教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況について点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、これを議会に提出するとともに、公表しなければならないことに基づき作成するものである。

2 点検及び評価の手法

外部評価を行うこととし、下記の学識経験を有する者の知見の活用をするものとする。

第一次外部評価	学校教育	実務的専門家	鎌田 央	狩川東興野
	社会教育	実務的専門家	中里 健	鶴岡市宝町
第二次外部評価	総括	学問的専門家	和田 明子	東北公益文科大学

3 点検及び評価の対象

「平成26年度庄内町教育委員会の重点と視座」に基づいた学校教育と社会教育の「政策及び施策」レベルの事業

4 外部評価の内容

以下報告書のとおり

和田明子

本外部評価は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条に基づき、毎年教育委員会の権限に属する事務の管理・執行の状況について点検・評価を行うものである。具体的にどのような方法で行うのかは各教育委員会に任されており、庄内町教育委員会では学校教育・社会教育のそれぞれに精通したお二人の先生に評価をお願いしている。

過去の評価の際にも述べたが、他市町村では現場を見ない書類だけの評価やいわゆる「事務事業評価」に終わっているところも多い中、庄内町教育委員会ではお二人の専門家が現場を訪問した上で評価する方式をとっている。その点が他市町村とは異なる庄内町教育委員会評価の大きな特徴であり評価される点である。まずは、それを可能にしているお二人の方のこれまでのご尽力と熱意、そしてそれに真摯に対応し評価結果の改善に努めている教育委員会・教育現場の皆様にあらためて敬意を表したい。

お二人の先生は、年間を通して相当の回数現場を訪問し話をきき多くの資料に目を通した上で評価を行っている。本評価に限らず、一般に評価活動というものは毎年行っているとマンネリ化するものであるが、お二人の先生は毎年少しずつ違った観点から評価し、新鮮な知見を教育委員会及び現場に提供している。また、主観的な評価に陥らないよう、「学校評価アンケート結果」などできる限り客観的な根拠も示すよう心がけている。役場全体で行われている事務事業評価との差異化を図るためにも、地教行法に基づく本評価は今後ともこの方式を大切にしていけるとよいのではないかと。

学校教育・社会教育分野で従来策定されていた様々な「Plan」がこれまでの評価結果を受けてある程度整理・統合され、今般平成28年度から実施予定の庄内町教育振興基本計画が策定されつつあることは高く評価される。さらに社会教育分野において現在策定されている「社会教育の基本方針と重点施策」が「教育振興基本計画」とそれに基づく「重点と視座」に統合されることになれば、学校教育分野と社会教育分野がともに共通の「Plan」をもとに評価されることになり、本評価の整合性はより一層高まるであろう。

平成28年度事業分からは教育振興基本計画とそれに基づき毎年策定される「重点と視座」を共通の土台として本評価が行われることを前提とした場合、次の二点に留意して評価を行う必要があると考えられる。

第一に、教育振興基本計画に示される予定の「基本方針」や「主要施策」と、毎年策定される「重点と視座」との整合性をとることである。それらの整合性がとれていないと、再び評価の土台が異なる事態が生じてしまう可能性がある。

第二に、教育振興基本計画に示される予定の「評価指標」の達成度も評価対象になることが想定されるが、その場合「主要施策」あるいは「重点と視座」を推進することにより本当に評価指標を達成することができるのか、また「主要施策」や「重点と視座」を具体的にどのように推進していくのかをあらためて確認することである。言い換えれば、普段の仕事がどのように「教育振興基本計画」とつながっており、また評価指標の向上に結びつくものであるのかを担当者自身が認識する必要があるということである。

教育振興基本計画の策定を含め本評価をより有意義なものにするために関係者がこれまで積み重ねてきたご努力に重ねて敬意を表すとともに、庄内町独自の評価手法を大切にしながら、今後とも現場にとってより意味のある評価が行われていくことを望みたい。

1 思いやる心と健やかな体を育む教育の充実

- (1) よわい者や人の内なる心を思いやる心の充実
- (2) 違いを尊重し許容する道徳教育の充実
- (3) 子ども一人ひとりの感じ方を生かし、自己を振り返り生き方をもとめる道徳教育の充実

<道徳教育推進地域支援事業>

○道徳の授業改革の背景にある、子どもを取り巻く教育環境の変化や深刻化する子どもたちの心の問題を認識し、教委として正面から向き合い、しっかりと本質を見据えた授業づくりを指導している。即ち、子ども一人一人が自分を見つめ、自らの内なる「よさ」に気づき、未来を切り拓いていくより良い生き方を学ぶことができる授業づくりである。

○道徳教育推進校の立川小学校において、「生きる力＝総合的な人間力」のもととなる「心のエネルギー」を育むことを目指し、道徳を窓口にした研究・実践が進められている。道徳の時間の充実と併せて、他教科・領域・行事との関連を図った総合単元の構成や、地域素材の活用等にも取り組んでいる。また、従来から取り組んできた独自の『立川しぐさ』（にっこりしぐさ・あったかしぐさ・思いやりしぐさ）を、道徳的実践力が発揮された一つの姿として再確認し、全校で継続・推進している。地域の特性を生かした自校ならではの道徳教育プランの構築を目指している。

立川小…『夢をもって豊かにかかわり、自己の生き方をよりよくしていく子どもの育成』研究2年次の今年度は、「心に響く道徳の時間の充実」をめざし、「交流の場の充実」を重点課題に、効果的な手立ての在り方を探った。

体験を取り入れた課題解決型の授業を構想し、実践を積み上げている。

学年の実態や主題に応じて、板書の構造化、ソーシャルスキルの場面設定、ペアによる動作化、グループ討議等様々に工夫しながら個々の児童の思考を促し、全体の話し合いの深まりを図っている。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「困ったことの相談や励まし」A・B評価 89%

「立川しぐさへの取り組み」90%

保護者による評価…「立川しぐさを中心にした思いやりや自主性を高める指導」92%

学校づくり懇談会委員アンケートより…『「孫親参観日」の中に道徳もあり楽しみながら教えられた』

- 道徳教育地域支援事業を受けた立川小学校の研究・実践の内容（その本質）と今年度の成果・課題（価値づけ）について、教育委員会として整理し、発信していくことが必要ではないか。それにより道徳教育の目指す方向性が各校に明示され、共通認識のもとで各校の取り組みが工夫され、道徳の時間の充実につなげることができよう。

●今年3月、文科省は学教法施行規則と学習指導要領を一部改正、『特別の教科 道徳』を定めた。実施は小学校が2018年度、中学校が翌年度からだが、特例により学習指導要領の規定に基づく道徳教育を2015年度から実施することができるとされている。推進校の立川小学校では教科化に向けて先行的に研修を重ね、年次的に全体計画の見直し等も進める計画である。その成果を他校にも波及、拡大していく方が必要であろう。学校現場の混乱や不安を解消するためにも、「教科化」の意図や目標・内容、「教科化」で変わる事・変わらない事等について、教委からの適時の情報提供や指導が必要と思われる。

○道徳教育を学校づくりの基盤として全校的な取り組みを推進し、子どもの心を育もうとしている学校が多い。自校の実情に即した独自の取り組みを工夫している。学校研究と連動させながら、人と関わる力、相手理解や思いやりの心を育てる取り組みを進めている学校がある。

余一小…めざす子ども像の一つに『がんばっている友達が紹介できる子』を掲げ、全校で取り組んでいる。友達の頑張っている姿を見つけようとする事が日常化されるとともに、子どもたちの関わり方や学級の雰囲気良くなってきている。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「友達となかよくしている」A・B評価 98%

「頑張っている友達を見つけ紹介」74%

保護者による評価…「相手理解」91%

余二小…ピア・サポートプログラムを取り入れ、縦割り班活動や交流活動を充実・推進し、「支えあう人間関係」、「思いやりのある学校風土」づくりを図っている。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…『やさしい』について

3年「相手の気持ちを考えた行動や言葉づかい」A・B評価 75%

6年「自ら気づき、判断、進んで思いやりのある行動」86%

保護者による評価…「思いやりのある行動」80%

P T A重点取り組み「ありがとうといえる素直な心の育成」85%

余三小…学校研究「自分の考えを伝え合う子どもの育成」を通して、言葉を通して互いの考えを理解し、相手の考えを尊重する心を育てている。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「学級・学年のみんなと活動するのはたのしい」A・B評価 93%

「ちがう学年の人と活動するのはたのしい」84%

「伝えることがじょうずになった」77%

保護者による評価…「学校は伝えることができる子どもの育成に努力している」89%

余四小…縦割り班活動を推進しながら、かかわりの中で自己を見つめ、互いを思いやる心や、励まし合い助け合う関係を育てている。児童会活動で、いいことをしたら紙に書き、貼り付けてモザイクアートを制作。思いやりの活動を目に見える形で残し、集約し、更なる意欲付けにつなげている。

《学校評価アンケート結果より》

児童による評価…「交流学習・体験学習は楽しくできた」 A・B評価 97%

「交流学習・体験学習は自分のためになった」 98%

保護者による評価…「異学年との人間関係」 3.59 ※注 満点は4点

「交流活動（自己を見つめ思いやる心の成長）」 3.36

立川中…学校研究の重点「自ら気づき、深まりや高まりを感じる授業づくり」を通して、生徒同士の関わり合い、高め合いを重視した学習活動や単元展開が増え、日常化が図られた。生徒会活動、地域学習、学級づくり等々の活動とも連動し、自他を尊重する心が育ってきている。

《学校評価アンケート結果より》

「自分も他の人も大切にしている」 A・B評価 生徒：98% 保護者：92%

「協力・自主的な行動ができています」 生徒：96% 保護者：84%

「感謝・思いやりの心を持っている」 生徒：94% 保護者：90%

余目中…「人間関係づくり」をあらゆる教育活動の基盤に位置づけ、全校で取り組みを進めている。生徒会活動『Happy Action』も根付き、生徒同士の温かい関係りづくりにつながっている。

《学校評価アンケート結果より》

保護者による評価…「楽しく充実した学校生活」 A・B評価 91%

「ルールを守り落ち着いた学校生活」 90%

「学校行事・生徒会行事が活発」 95%

(4) 人としてやってはならないことを守り、人や社会に役立つ心を育む教育活動の充実
＜南三陸町への復興支援交流＞

○各学校、児童生徒会、PTA、町等々で、様々な復興支援活動や交流体験活動が企画され、継続的に実施されている。それらの体験を通し、人のために動く喜び、自己肯定感や自己有用感、継続して行うことの重要性の認識など多くのことを学んでいる。人のために尽くす体験を重ねることで、感謝の気持ちや人を思いやる心も育ってきている。

○支援活動を継続していく中で、現地の人たちが今必要としていることは何かを考え、活動を工夫するとともに、交流を通して現地の人たちと共に歩んでいこうとする気持ちが育っている。

立川小…同窓会とJAの田んぼの先生の指導のもと、5年児童が育てた新米を「39

米(さんきゅうまい)」と名づけ、名足小に送る活動も継続している。先方より感謝の電話をもらうなど、温かい心の交流が続いている。

余一小…地元生産農家の指導のもと、田植えの後にクロメダカを放流し栽培管理する「メダカの里米」を、毎年秋には支援米として南三陸町へ送っている。また、集めたベルマーク預金で、伊里前小に希望の品を送る活動も行っている。

余二・三小…学習旅行で来町した南三陸町の伊里前小学校と交流活動。町内施設・企業見学、北月山荘宿、余三小6年が育てた枝豆を売って集めた義援金の贈呈、余二小5年児童らとのゲーム、ドッジボール交流などを通して、「いつまでも応援する」等々の思いを新たにした。

余目中…被災地と関連付けを工夫した単元を設定、教科の特性に合わせた作成・栽培活動を行い、被災地に送付し、交流を図っている。技術科でトマト・花の栽培。美術科で「一文字はがき」、国語科で年賀状を作成し、仮設住宅の人々と交流している。

震災4年目、復興支援テーマを「震災をわすれない」と設定し、様々な活動を展開。

2年PTAの親子研修で仮設住宅を訪問。地元の人々に合唱を披露した。3年有志でも仮設訪問を実施。

野球部・ソフトボール部・サッカー部・吹奏楽部で志津川中と部活動交流を実施。会食後仮設店の商店街「南三陸さんさん商店街」で買い物をし、自然な形で支援を行った。

- ・社会教育事業として、自然ふれあい館「森森」を会場に、南三陸町と余四小を中心とした庄内町の小学生(希望者)の国内交流を開催。両町の小学生と高校生ボランティア65名が参加、テント設営や野外炊飯、羽黒山古道登山、きなこあめづくり、間伐、カート等様々な体験を通し、自然の中で交流を深めた。
- ・7月12日、庄内町八幡スポーツ公園を会場に、庄内町と南三陸町のサッカースポーツ少年団が「スポーツで心の絆をつくろう事業」を開催。モンテディオ山形ジュニア庄内チームも参加し、モンテディオのアカデミーコーチから技術指導を受けた後、交流試合や記念植樹を行い、行流を深めた。
- ・町「希望の灯り」プロジェクト…町教育委員会の呼びかけのもと、余一小、余二小・余三小・立川中・余目中の児童生徒を中心に、大震災からの復興を祈って牛乳パックの灯籠作りを行い、南三陸町の公民館に送った。立川中では、その一部を立川庁舎や狩川公民館に飾り、3月11日に生徒有志で祈りの合唱を行った。
- ・南三陸町で漁業体験交流

11月に国際交流協会と町P連との合同主催で実施。3回目の今年度は、国際交流協会21名、当番校である立川中学校を中心に町P連51名が参加、歌津伊里前漁港でワカメの種挟み作業を行い、地元漁協漁師らと交流した。

ワカメ加工施設の復旧の見通しがまだ立っていない中、刈り取ったワカメを幼小中の給食にいただき、ワカメを通して漁師のみなさんと子どもたちとの絆も深まっている。

<地域ボランティア活動>

- 多くの小中学校で児童・生徒会を中心に空き缶やプルタブ、ペットボトルキャップ、牛乳パック等の回収活動を継続的に展開し、目に見える形で寄託・寄贈につなげている。全校での小さな取り組みが継続することで大きな成果になることを実感し、次の活動へ

の意欲づけ、主体的活動の基盤となっている。

立川・余一・ニ小…毎年空き缶・プルタブ回収活動を行い、福祉施設（山水園、徳州苑、ソラーナ）へ車いすを寄贈。

余一・二・三小・立川中…ペットボトルキャップの回収活動を行い、山形銀行を通し発展途上国へポリオワクチンを贈る運動に協力。

立川中…生徒が分担して各家庭を回り牛乳パックを回収。長年の継続により地域にも活動が浸透し、各家庭で自主的に学校に運んでくれるようになった。今年度は総重量1420kgにもなり、トイレトペーパー（ダンボール2箱）に換えて山水園に寄贈。

運動会幹部が中心になり、8月に発生した土砂災害の被災者（広島市と兵庫県丹波市）への緊急募金活動を行った。4日間の募金総額45,655円を、ボランティア「チームはちまき」を介して届けた。

<インクルーシブの推進>

○保護者の希望を受け入れて、特別支援学級に在籍する子どもも可能な限り親学級で学習している。親学級の子どもたちも当然のこととして受け入れ、日常的に自然な交流が図られている。

・在籍する肢体不自由児童に対して全校体制で移動を介助。学年を超えて関わる児童が多く、当該児童の存在が自然に受け入れられ、全校児童の心を育てる機会になっている。

・毎年、庄内地区の特別支援学校との居住地交流を実施。

・立川地区「あっとほ一む」、余目地区「たんぼぼ」に通所する子どもたちとの交流を実施。運動会や縁日を共に楽しんだ。

○障がいのある子どもたちと町ボランティアサークルの中高生らとの交流が積み重ねられている。自らも交流を楽しみながら、子どもの状況に応じて遊びの内容や関わり方を工夫する姿が見られる。

・余三公中高生ボランティア「J r S t a f f 四次元ポケット」が第三学区の学童保育所やふれあいホームひまわりを訪問し、バルーンアートや大縄跳び、けん玉等を楽しみながら交流を深めた。

●障がい理解や包括教育の推進は、教育の根源に関わる課題である。学校としてどう目的化し、経営構想に組み入れていくかは今後の大きな課題である。その上で、活動内容の見直しや教育課程への位置づけを検討していく必要がある。

2 総合的学力向上の構想を共有し、確かな学力の土台をつくる

(1) 人間と人間の関わりの中で育ち育てる（人が人をつくる）

<人間力（総合的な学力）の重視>

○「人間力」とは、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な学力」と定義されている。（内閣府 人間力戦略研究会）11月に本町の人間力（総合的な学力）育成の構想を図式化した『庄内町 学力づくりの構想』がまとめられた。授業づくりを機軸に、読書活動の推進、学び育つ子供の環境づくりと家庭・地域と共同した活動を展開し、多様な人との関わりの中で「よりよい生き方・高い志（人間力・総合的な学力）を育もうとするものである。

○この育成構想をどのように具現化するのが各校に問われており、自校の実情や学区

の特色に即し、具体的な授業づくりの工夫がなされ、地域を巻き込んだ独自の教育活動が展開されている。また、教委が中心になり、今年度初めて幼稚園、小中学校、公民館、地域団体や地域民一体となった活動が展開された。それらの積み上げの中で、本町独自のこどもを育てる環境づくりのシステムが整い始めている。

- ・「立川地域幼・小・中・公花いっぱい運動」…町の税務町民課と人権擁護委員会の委嘱を受けたことを機に、学社連携を深め、地域全体で子供を育てる気運を高めるとともに、地域の活性化にもつなげようというねらいのもと、運動が展開された。立川中学校前の交差点～立川カントリー付近までの歩道に、狩川幼稚園の年長児、立川小学校児童、地域団体や地域住民らで10人程度の混合グループをつくり、立川中の1年生がそのグループリーダーになり、花苗の移植等を行った。教え教えられしながら自然に交流し、笑顔いっぱいの作業となった。
- ・「あいさつ運動」…庄内町商工会の企画による運動だが、4年目となる今年は「立川スタンダード（立川小中学校連携）」を中心に、幼・公・地域と合同で「笑顔で元気なあいさつ運動スタートアップイベント」を企画・開催。総勢500人の参加が得られた。立川中生徒会が考えた「あいさつ3ヶ条」が発表され、参加者全員で復唱。立川地域の子どもと大人が一体となったイベントとなった。
- ・町教育研修所の教育講演会が響ホールで開催され、町内の全教職員が研修した。
演題：「なんのために？ 出会いを生かせば道は開ける！」
講師：(有)クロフネカンパニー代表取締役社長 中村文昭 氏
人との出会い、関わりの中で生き方を学び、誰かのために働くことや社会の役に立つことが「生きる」ことの意味だと語る氏の言葉に、多様な人との関わりの中で「よりよい生き方・高い志」（人間力・総合的学力）を育もうとする本町の『庄内町 学力づくりの構想』が確かめられた。
- 子どもたちが人間力—総合的学力を獲得するために、教師と子どもたち、子どもたち同士、子どもたちと家庭・地域社会との豊かで創造的な「関わり」が、各校で工夫されている。「人が人をつくる」構想の具体化であり、それら集約・整理しながら、「学び育つ子供の環境づくり」のシステム化や「指導のネットワークづくり」が教委に求められている。

<町の行事や施設、自然、人々との交流体験推進>

- ※「4 庄内町の気候風土、自然、社会、文化を学び、豊かな心を育む計画的な体験 交流の中で助け合い、支え合いの社会力を育む 期待される地域の自然・社会体験活動」に記載

3 子ども一人ひとりの意欲的な学びづくり

(1) 授業像の共有と授業改善

<一人一人の力を伸ばすための授業改善>

○町教育研修所を中核にして、教員一人一人の資質や指導力の向上を目指し、教員のニーズや時代的要請に応じた研修を工夫し、積み上げている。

- ・担任力向上を図る「担任力向上研修会」を毎年継続的に開催。
- ・一人一人の子どもへのきめ細やかな指導・支援と確かな学力の定着を図るとともに、町配置の学習支援員の力を最大限に生かす「TT指導法研修会～庄内町方式を探ってみ～」を実施。

※「9 教員の資質向上 研修所の研修と教育課題の共有化」に記載

- 文科省や県教委事業を積極的に受入れ、目指す授業像を全校で共有するとともに、改善への意識付け・意欲付けを図っている。指定校として機会が拡充した外部指導者の指導・助言を存分に活用し、研修の充実・推進につなげている。
- 学力向上に向けて、数年前より秋田県東成瀬村の教育委員会及び小中学校と交流し、その取り組みに学びながら、具体的な授業の改善につなげている。

余一小…『学び合うのが楽しい子どもの育成～「わかる」「できる」喜びを味わう算数の学習をめざして～』

- ・授業づくりの視点を「学び合う場の設定」と「学んだことがつながる場の設定」に絞り、自校としての課題解決型の学習の流れを確立した。
- ・東成瀬村に学び、本時のねらいとまとめの整合性を重視し、終末の「振り返り」の時間の充実を図った。
- ・児童の意欲を高め、学びの必然性を生み出す課題の設定を工夫。終末に視点を与えた「振り返り」をすることで、自分の学びの意義や学んだことのよさに気づかせた。

余三小…算数科モデル単元開発・発信事業指定 庄内町教育研修所研究委嘱

『自分の考えを伝え合う子どもの育成一言語活動の充実を通して考える力を育む授業づくりをめざして～』

- ・良好な人間関係づくりを研究の土台とし、Q-Uテストや個人面談をもとに学級全体の傾向を把握し、一人一人のよさを認め合い高め合う学級づくりを進めた。
- ・「シナリオ授業」でよりよい話し合いのイメージや具体的な進め方を子どもと教師が共有したり、「論点」を設定して話し合いの活発化を図ったり、「単元を貫く言語活動」を仕組んだ単元構成を工夫したりすることにより、話し合い活動を楽しみながら、自分の考えを生き生きと発言する姿が多く見られるようになった。伝え合う力の伸びも見られてきた。
- ・この研究成果をもとに、今年度は話し合いを「学習課題達成・解決のための手段」と押さえ、目的をはっきりさせ「言語活動の充実」を通して「考える力の育成」を図ることに焦点を絞って研究を進めた。
- ・秋田県東成瀬村に学び、授業の終末に必ず「振り返り」の時間を位置づけ、何が分かった（できた）かを確認することを継続した。自己の変容を自覚することにより、学習内容の確実な習得と学習意欲の向上につなげている。

<学力向上・家庭学習の習慣化（自学自習の充実）>

- 町教育研修所の研究部において、「学力向上につながる家庭学習」をテーマに各校で取り組み、その実践や課題を交換し合う場を設定し、自校の取り組みに生かしている。
- 児童生徒や教職員、保護者等のアンケート結果とともに、各校の課題を吸い上げながら、課題の本質と今後のあるべき方向性を明示するとともに、町教育研修所や校長会、社会教育、PTAと連携しながら、具体的な取り組みを推進するための指導・支援を進める必要がある。

余一小…授業づくりの視点の一つ「学んだことがつながる場の設定」（終末時）において、「意欲につながる家庭学習」を研究している。学習したことを家庭学習につなげ、家庭学習が次の授業につながるような実践を工夫し、少しずつ積

み上げている。

(2) 読育を培う環境づくりの推進

<学校支援地域本部事業の充実>

○小学校では、各校に配置されている地域コーディネーターが核となり、地域と連携した図書館活動を推進している。学校の図書主任と連携しながら、学習活動の充実につながる図書館環境づくりや読書推進活動を行うとともに、地域ボランティアを募って、読み聞かせや図書館の環境整備活動を進めている。事業開始から4年を経て活動も定着・充実しており、庄内町のこの方式は学校・地域連携事業の一つのモデルと言えよう。

●家読、言語活動の充実につながる学習環境支援については、町全体の課題である。幼稚園や学校での読み聞かせや読書が充実しても、「家読」の浸透にまではつながらない現状である。読書の楽しさだけでなく、読書することの意義（良さ）や学力との相関関係を示していくことも一策ではないか。

○中学校では、平成27年度より学習分野で本事業を活用し、進路実現に向けた学習会『夢サポート塾』を開設している。少子化に伴い教職員数が減少している学校の現状を踏まえ、3年生を対象に、教員OBや大学生など地域住民による学習支援を行う。平成26年度は、その試行として、立川中学校区で夏季・冬季休業中に各3日間、地元の中学校退職教員等を講師に、国・数・英の3教科について「塾」(学習会)を開設。案内・募集と併せて「講座内容希望調査」を取り、生徒の希望に沿った領域・内容で集中講座的に実施した。夏季は6名、冬季は14名の希望参加があり、真剣且つ意欲的に学ぶ姿が見られ、手ごたえを感じる先行実施となった。

<「地域と共につくる学校」の推進>

※「5 地域の学校として特色ある学校づくりのマネジメント推進」に記載

(3) 小6・中1・中2連携プロジェクトの活用

<不登校を減らし、一人一人が輝く生活・学習づくり>

○「立川スタンダード」「余目アソシエーション」を中核に、各中学校区の実情や課題を踏まえて、それぞれの特色を生かしながら、義務教育9年間のつながりを意識した小中連携活動を推進している。

○「立川スタンダード」では、地区内1小学校、1中学校、校舎隣接という好条件を活かし、それぞれの特性・独自性を尊重しながらも、相互に学校経営を開き、連携活動を推進している。予想される課題を共有し、共に解決しながら、学制の枠を超えて義務教育9年間を見通した教育活動をめざす一つのモデルケースとなろう。

○小中学校の「なめらかな接続」や「スムーズな移行」と併せて、成長を促す「意味のある段差」の必要性も考慮しながら、土台となる自尊感情や自己有用感の育成を図っている。

○両地区ともに、学区の小中学校の管理職らで構成される連携推進体制が整備されたことは大きな成果である。協議回数は多くはないが、P(計画)・D(実行)・C(評価)・A(修正・是正の働きかけ)サイクルで効果的に小中連携活動を進めていくシステムが構築されたことになる。この組織、システムの効果的な活用を図る工夫が今後の鍵を握ると思われる。「立川スタンダード」では小中連携企画会議(校長・教頭・教務

主任)を年2回、小中連携推進会議(校長・教頭・教務・部長・特支担当)を年2回開催した。「余目アソシエーション」では小中連携教育推進会議(校長・教頭・教務主任)を年1回開催した)他に新たな組織は作らず、既存の組織を活用して協議をする。

- 余目アソシエーションでは、中学校の負担軽減と小学校のより積極的な関与の観点から、事務局を小学校持ち回りで行うことも検討されている。また、小中連携とともに、小学校間の連携も図っていこうという動きが出てきた。小学校の積極的・主体的な受け止め方が、今後の連携活動を押し上げていく大きな原動力となると思われる。

【立川スタンダード】

- ・今年度初めて小中合同授業研究会を開催。立川中の授業研究会に立川小の全教職員が参加、事後研究会も合同で行った。立川小児童が全員立川中に入学してくるというメリットを最大限に生かすために、小中教員が共に児童生徒を見ていくことの重要性が再認識された。
- ・小6児童が中学校で学習する「体験授業」は英語を実施。・中3生徒のキャリア教育の一環として、3日間小学校で職場体験。中学校生活を説明する場も設定されており、授業や家庭学習のノートの「実物を用いて児童に話すなど、工夫が重ねられている。
- ・年3回小中合同で「アウトメディア」(ゲームやパソコン、ケータイなどを使用しない日)を実施。小では「5時間我慢できなかった」人が減った、中では「家族との会話が増えた」などの成果が得られた。
- ・今年度初めて小中PTA合同の教職員歓送迎会を実施。100名を超す参加者で盛大に開催できた。
- ・小中合同で民生委員との懇談会を実施。
- ・「あいさつ運動」「花いっぱい運動」で、幼・小・中・公・地域と連携した活動を展開した。
- ・中学校の行事については、小6児童の保護者あてにも案内を配布、中学校への理解を図ろうと努めている。今年度は「LINE研修会」の案内を配布し、参加も得られた。

【余目アソシエーション】

- ・中学校の「行事見学・体験授業」を4小学校がそれぞれ選択し、児童に体験させることにより、具体的な中学校生活の情報を提供している。
 - 余一小…合唱コンクール2年の中間発表を見学 美術の体験授業
 - 余二小…合唱コンクール3年の中間発表を見学 理科の体験授業
 - 余三小…生徒会役員選挙立会演説会を見学 保健体育と英語を体験学習
 - 余四小…田川地区総体の壮行式を見学、技術家庭を体験学習、中3生徒のキャリア教育の一環として、2日間小学校で職場体験。
6年生に中学校生活について語る場面も設定。
各校の授業研究会に一人1回は参加する。

<教育相談専門員・教育相談員の配置事業>

- 立川中に1名の教育相談員(県)、余目中に教育相談員1名(県)及び教育相談専門員1名(町)を配置。人的環境づくりという観点から教育相談体制が整備されている。
- 余目中では、「新たな不登校を出さない」ことを学校全体の課題とし、学級担任・養護教諭・相談員との連携を強化。校長の主導で専門員も職員会議に参加する体制をつくり、情報を交換・共有することでよりの確な対応が検討され、全校体制で取り組んだ

結果、不登校が改善されてきている。

<新教育相談体制「ほっと相談体制」の定着>

- 余目中の教育相談室に「ほっとルーム」が開設されて2年目。町教育相談専門員が常駐、生徒は休憩時間等に自由に来室できることから、一般生徒の来室数が増えている。生徒の心の開放や悩みへの早期対応等に機能している。また、幼稚園の保護者からの電話相談等もあり、相談室を媒介に新たな幼小中の縦のつながりがつくられてきている。
- 町内全園・小中校を対象に、園は年1回、小中校は年2回の定期訪問を実施。中学校の不登校の現状等を伝えながら、中学校単独の問題ではないという認識のもと、未然防止のための根源的な対策（各発達段階でなすべきこと、仲間づくり、自己決定の場を増やす等々）について共通の意識づけを図っている。

(4) 児童会・生徒会自治活動の推進

<児童会・生徒会リーダー研修会>

- 児童生徒のリーダー性や自浄力・自治力の育成を目指して、年1回児童会・生徒会代表者を対象に「リーダー研修会」を実施し、積み上げを図ってきた。他校リーダーとの交流に触発され、自校の活動にもより主体的・積極的に取り組むようになってきた。それとともに、自己有用感や自尊感情も育ってきている。
- ・余目中の佐々木教諭より南三陸町とのボランティア交流についての話を聞き、大きな刺激となった。
- ・「あいさつ」「ボランティア」「いじめ撲滅」のテーマ別の話し合いでは、小中混合グループを編成したことにより、小学生は中学生のレベルの高さに学び、中学生は調整力や運営力を学ぶ機会となっている。
- ・他校のリーダーと交流することが大きな刺激となっている。各テーマとも真剣に討議され、建設的な意見が多く出され、研修会に参加したリーダーらの意識の高さと成長が伺えた。オピニオンリーダーとしてより積極的に発信し、自校の活動を主導していくことを期待したい。

4 庄内町の気候風土、自然、社会、文化を学び、豊かな心を育む計画的な体験

(1) 交流の中で助け合い、支え合い等の社会力を育む

- 東北公益科大学、庄内総合支庁主催「公益教育セミナー」における講演会に各校の校長や教職員も多く参加し、地域連携の目的や目指す方向性を再確認し、自校なりの実践を確実に積み上げていこうという思いを鼓舞する機会となった。

演題：「子どもと大人の社会力育てが学校と地域を救う」

講師：前筑波大学名誉教授 現茨城県美浦村教育長 門脇厚司 氏

(2) 期待される地域の自然・社会体験活動

<異世代との交流体験・地域ボランティア体験の推進>

<子どもたちが地域の一員として役割を果たす活動体験>

- 多くの園・学校で福祉施設の訪問・交流活動を教育課程に位置づけながら、各園・校独自の多様な活動を展開している。それらの体験を通して、多様な人の存在を認識し、関わり方を学び、地域の一員としてできることを考えながら、自己の生き方を見つめ

る機会となしている。

○園・学校共に地域の風土や文化に触れる多様な活動が企画され、地域のよさを感得する機会となっている。また人との関わりを深めながら、子どもたちに「地域の人から温かく育てられている」という実感をもたらすものになっている。

○地域や教委の求めに応じるというだけでなく、学校としてその意義や教育的効果を実感したことにより、多様な要素が盛り込まれ、より豊かな学習が展開されている。

余一幼…「ぼくたち、私たちの住む庄内町、いいとこだぞ！」のテーマの下、地域の人々との多様な交流をもとに、町の良さを感得できる豊富なプログラムを作成・実践している。かがり火祭りへの参加、ポン菓子作りの見学、集落探検など地域に出向いて行う活動が多くなっている。青少年赤十字活動の一環として行った徳洲園訪問では、花笠音頭やペンギンダンス等の披露や、「100歳ばんざい」を歌いながらの肩たたきをし、お年寄りや職員と楽しく会話をした。

余二幼…今年度初めて年長児35名が地域密着型特別養護老人ホーム「ラ・ルーナ」を訪問し、歌や花笠踊りの披露し、おしゃべりや肩たたきで交流。施設利用者は園児らの発表やおしゃべりを楽しみ、施設は笑顔に溢れた。

余三幼…今年度初めて園児30名が小規模多機能型居宅介護施設「ほなみ」を訪問し、「庄内もちつきロック」の音楽に合わせて踊りを披露、おしゃべりや肩たたきで交流を深めた。庄内町オリジナルの「庄内もちつきロック」のPRも兼ねた初企画だったが、園児らのかわいい姿に施設利用者の歓声が沸いた。

余四幼…余四公主催の高齢者研修事業「和合大学院」との交流を通して、地域のお年寄りに優しく可愛がられるうれしさや、一緒に過ごす心地よさを感得させることを図っている。昔遊びや昔の生活体験談を楽しみながら、温かい交流が積み重ねられている。

立川小…4月下旬に立川ホテル研究会の指導のもとで児童が育てたホテルの幼虫350匹を、4・5年生70名が二俣農村公園の水路に放流。成長したホテルが飛び交う姿を楽しみに、ホテルの里づくりに加わっている。

余三小…庄内総合高校の「地域に開かれた学校づくり」に、近隣校として余三小が協力し、「連携授業」を開催。指導する・される双方が学ぶことが多く、共に楽しみながら交流を深めている。庄総3年生18名が余三小を訪問し、英語学習を実施。6年児童46名は昔話にまつわる英語クイズや英語版「もたろう」の寸劇を楽しみ、英語学習の面白さを味わう機会となった。

5 地域の学校としての特色ある学校づくりのマネジメント推進

(1) 校長・園長のリーダーシップとマネジメント力の向上

○各校・園の管理職がしっかりリードしながら、P（計画）・D（実行）・C（評価）・A（修正・是正の働きかけ）サイクルに立脚した堅実な教育経営を進めている。教育委員会は、各校・園の自律的な改善の動き（意図的・計画的な経営戦略）を奨励しながら、積極的に支援している。

< 体罰・いじめのない学校づくり >

○いじめの未然防止策は何より人間関係づくりであるという認識のもと、学級づくりの基底として全校での取り組みを推進し、子どもの心を育もうとしている学校が多い。

自校の実情に即した独自の取り組みが工夫されている。

- 当事者である子供たち自身の意識と行動を高め、自主的な活動を促すことをねらって、町児童会・生徒会リーダー研修会において、「あいさつ」や「ボランティア」とともに「いじめ撲滅」を話し合いのテーマに据えている。「いじめをしない、させない、許さない学校」にするために、小中各校で取り組みを進め、発表・意見交換をもとに、さらなる推進を図っている。
- 余目中を会場に、立川・余目両校の生徒が一堂に会し、人権フォーラムを開催。中学生による人権作文の発表、「さらなる一步を踏み出そう！」と題したシンガーソングライターの立木早絵氏の講演とピアノ弾き語りが行われた。「心のバリアフリーはまだ進んでいない」という呼びかけに、体罰やいじめの撲滅を再確認する機会となった。
- 各校の「いじめ防止基本方針」は作成されており、町生徒指導主任会議においてその活用研修を進めている。次年度に「町いじめ防止基本方針」を作成する計画であり、その作成と周知が当面の課題である。

(2) 施設・行事を活用した教育活動の推進

<「地域と共につくる学校」の推進>

- 教育長の構想のもと、理念を共有しながら、学校と地区公民館、地域団体、保護者や地域住民が一体となった活動を展開し、学校を支える教育環境づくりや「地域と共につくる学校」を推進していこうとしている。学校に参画することで、地域の活性化も図られ、新たな地域づくりにつながるといえよう。
- さらなる活用を進めるために、町社会科副読本「わたしたちの庄内町」の小改訂（数値等）を行うとともに、指導の実践事例を盛り込んだ増補版を作成した。また、副読本を活用した小学校社会科の指導を中学校の教科担当が出前授業の形で行うなど具体的な指導を積み上げて、地域理解を進め、郷土への誇りを育てる一助としている。
- 「町巡り」研修や子どもと共に進める地域学習を介して、学校と地域との関わりを実感し、「地域に生きる」「地域を担う」という観点から子ども育んでいこうという意識の教職員が増えている。
- 地域学習、地域との交流学习等々を大切な視点としながらも、それゆえに重点化・焦点化し、子どもたちが一つのことに時間をかけてじっくり取り組めるよう配慮することも検討したい。また、子供を取り巻く教育環境をより豊かにしていくとともに、地域の活性化にもつながるとい認識で、保護者、公民館や地域団体との連携活動を進めている。

6 人間性の基礎を培う幼児教育の強化

(1) 特色ある園づくりに向け、経営研修の推進

<地域の力を生かした園経営>

- どの園においても、保護者による絵本ボランティアや園行事ボランティアの活動が展開されており、参加が積み上げられていくにつれ、温かな協力関係が築かれている。参加保護者同士の交流も生まれ、横のつながりが自然に醸成されてきている。
- 地域住民との交流活動も年々拡充してきており、それぞれの園において、年間を通して地域に根ざした豊かな体験活動が展開されている。まさに「地域の力を生かした園経営」「地域と共に歩む園児経営」が具現化されている。

○親子研修会等の企画を通して保護者も地域体験活動を共にすることで、副次的に保護者の地域理解も深まり、地域ぐるみで子どもを育ててもらっていることへの感謝や信頼も生まれている。

狩川幼…「あいさつ運動スタートアップイベント」に年長児が参加。初めての中学校訪問に緊張しながらも、中学生の呼びかけに大きな影響を受けた。生徒会が作ったスローガンを家庭にも広めたことにより、園と家庭の両方で意識してあいさつをするようになった。

「花いっぱい運動」に参加し花植えの手伝いをしたことで、子供たちから水かけを始めるようになった。その姿を見た地域の人々がたいそう喜び、声をかけてくれるなど、多様な広がりが見られた。

園外保育でホタルが飛び交う二俣農村公園に出かけた際に、立川ホタル研究会の方から幼虫を見せてもらったり、ホタルの生態について話を聞いたりした。地域の自然の面白さに目を向けるよい機会となった。

地域より「かっぱのうた」のレコーディング依頼があり、短い練習期間ながら子供たちは意欲的に取り組み、年長児30名全員の歌声がCDになった。子供たちなりに地域の期待に応えられた喜びと誇りを味わうことができ、その後のいろいろな活動にも自信を持って積極的に取り組むようになってきた。

余一幼…「心が通い合う人間関係や交流の充実」「伝統文化（伝承文化）との出会いを大切に」等を経営の重点に掲げ、地域の人々との多様な交流をもとに、地域の良さを感得できる豊富なプログラムを作成・実践している。活動のネーミングにも工夫を凝らし、園児や地域指導者の活動意欲を掻き立てるものになっている。

「ちびっこファーマー・シェフ 畑の先生！おしえてください！」

「なるほど伝承おやつ！ 庄内伝統の味！ばあちゃんのささまき教室」
など

「地域の師匠」（地域ボランティア）の協力を得て、地域の伝統「榎島ほうき作り」の一連の流れ（ほうききびの苗植えから刈り取り、ほうき作りまで）を体験することができた。保護者も園児と共に活動に参加することで、保護者の地域理解も図られている。

余二幼…「地域とともに育つ幼稚園」をめざして、身近な自然や様々な人々との関わりを充実させる工夫をしている。

地域の指導者の協力を得て、感動体験や直接体験（五感で感じる体験）を計画的に年間計画に取り入れている。（田んぼや川での生き物探し、稲作り、クッキング等）

陸羽西線100周年記念事業に年中児が参加。駅前広場でのセレモニーで花笠踊りを披露したり、機関車に旗を振ったりと、地域の一員としてキャンペーン活動を行った。他にも地域のゴミ拾いやボランティア運動、施設訪問等の様々な活動を通して、役に立っている、喜んでもらっているという実感が得られ、活動への意欲が高まった。

余三幼…園行事の「コマ回し大会」に伝承遊びを取り入れたことにより、地区公民館長や地域のお年寄り、祖父母の参加が得られた。「楽しかった」と好評で、地域の人々を巻き込むきっかけとなった。

幼稚園の預かり保育利用児と同敷地内にある学童保育「ひまわり」との交流を、年に数回行っている。園児が作ったよもぎ団子や焼き芋のプレゼント、夏休み中の合同避難訓練、園の運動会への招待、「ひまわり」での竹馬や縄跳び、ポックリ、オセロ遊び等の交流を重ねることで、園児らの小学校就学への期待が膨らむようになった。スムーズな学童保育への移行にもつながっている。

余四幼…保護者による園行事ボランティア（全保護者が家庭の都合に合わせて行事を選択、年に1回ボランティアとして行事の運営に参加する取り組み）も4年目となり、余四園の運営の特色となっている。小規模幼稚園として職員数も限られている中、安全面での配慮も手厚くなり、行事運営もよりスムーズに行えるようになっている。

第四公民館運営協議会や和合地域作り会議に園職員が参加し、共に話し合う中で、園の地域理解が進むとともに、地域住民の園の経営や活動への理解、協力の気運も高まっている。

余四公との連携を核に、「ひまわりっこ」や「和合大学院」（公民館主催の高齢者研修事業）との交流、公民館祭への園児作品展示やの資料館雛人形展への手作り雛の出品協力、社会福祉協議会の「高齢者世帯とのさわやかふれあいの集い」への参加、「館報」への情報提供等を通して、確固とした地域とのつながりができている。

幼稚園を支援する地域の有志で構成された「和合めんごの会」との話し合いが継続的に行われ、園長の采配で園運営にうまく生かされている。

<園での子育て相談支援工夫>

- 預かり保育は年々利用者が増え、保護者を支える大きな力となっている。利用保護者のニーズも多様になってきているが、前向きに受け止め、預かり保育担当職員と正規職員との連絡を密にしたり、正規職員も交代で預かり保育に入り子供の様子を細かく把握したりしながら、対応や活動の改善・充実に努めている。
- 降園後に3分の2の園児が残る園もある。発達段階から考えても、長時間にわたる園生活は子供にとって大きな負荷である。預かり保育利用園児の中には特別な配慮を必要とする子供もいる。園児を中核に据えて、保護者との話し合いを密にしながら、よりよい教育環境づくりを共に考えていく必要がある。
- 様々な問題状況や家庭事情を抱える園児が増加している状況を踏まえ、「気になる子の訪問指導事業アドバイザー」を活用し、図っている。
- 子育て支援の一環として、保育参加や園行事ボランティア等、園ごとに保護者が子供の成長を感じ、子育ての楽しさを実感する体験を様々な工夫している。保護者に寄り添いながら、「共に育てる」関係づくりを進めている。
- 保護者の勤務や家庭事情に配慮して「子育てトーク」や保育参観日の期日や時間を柔軟に設定したことにより、保護者との信頼関係が深まり、相談回数や参観人数も増えてきている。園の真摯な努力により、「いつでも相談にのる」体制づくりが進められている。
- 保護者の横のつながりを構築するために、園ごとに、保護者同士が子育ての悩みを語り合ったり先輩保護者が相談にのったりする場づくりを工夫している。

狩川幼…保護者同士が話し合い、先輩ママからの情報やアドバイスがある「クラス懇

談」

余一幼…保護者や地域の人々同士、職員との語らいの場「ふれあいほっとティールーム」

余二幼…少人数のグループ懇談会、場所を公民館に移しての「カフェトークタイム」

余三幼…茶菓を準備した「おしゃべり親の会」

余四幼…保護者同士が自由に語らう、保護者主催の「クラスカフェ」

7 命を育む教育活動の充実と推進

(1) 安心・安全な地域づくりの推進

＜通学路安全対策協議会活動の充実＞

○通学路アドバイザー事業を活用し、各小学校区において通学路合同点検を実施、アドバイザー（警察官OBら）による専門的見地からの指摘や助言を生かし、安全指導につなげている。安全面から通学路の一部を変更した学区もある。

(2) 共に命をつなぎ合う社会、いじめを絶対許さない土壌づくり

※「5 地域の学校として特色ある学校づくりのマネジメント推進」に記載

8 地域社会を支え、国際社会感覚のある人材の育成

(1) 中高生の海外研修の推進

＜合併10周年記念事業「マレーシア研修」＞

○国立高専生1名、県立高校生3名、庄内町中学生5名が参加。異年齢の研修生同士の関わりや引率協力者や現地の人々との交流を通して、自ら積極的に他者と関わろうとする姿勢が出てきた。また、現地での生活や文化に触れることで自国や地元地域のよさを再認識し、将来の就労や生き方を考える貴重な機会ともなった。

○自分が育った地域の伝統や生活文化に誇りを持つと同時に、他国の伝統や文化を認識し敬意を持つことが、グローバル時代を生きる子どもたちに求められる力の両輪である。自身の芯となる基盤を持つことがグローバルに通用する基本であり、そのためにも、地域の中で子どもたちが温かく支えられ与えられるだけでなく、地域の一員として役割を果たし、伝統や文化の担い手として育っていく場面づくり、仕組みづくりが必要である。

9 教員の資質向上

(1) 研修所の研修と教育課題の共有化

○町の子どもの実態や課題と教職員のニーズをすり合わせながら、実効性のある研修を企画、実践しながら、日々の実践につなげている。

○庄内町に勤務する幼・小・中・公の職員が枠を超えて課題を共有し、事務局会と6つの専門部会に分かれて研修・実践交流を進めることで、一貫教育の視点が強化され、相互のネットワークづくりが図られてきている。

研究部

○「園・校内授業研究会情報」の発行。これを活用し、年間の見通しを持って、一人1回他園・校の授業参観に出向くことができるよう校内体制を整えた学校が増えている。

○「庄内町方式TT指導法研修会」の開催協力。

・「T1、T2の役割を明確にした効果的な指導」「多様なレベルの練習問題の提示」等

を重点にした余一小の算数の提案授業をもとに、ワークショップ形式で「一人ひとりを伸ばす指導の手立て」「これからやりたい効果的なTT指導法」等について情報交換・協議を行った。

- ・昨年度に引き続き、数学教育実践研究会（小金井市立第三小学校教諭）の森川みや子氏の講話「楽しく一人ひとりを伸ばす算数の授業づくり」をもとに研修を深め、自校の授業改善へつなげる有意義な機会となった。
 - ・「庄内町方式」の確立・拡充のためにも、TT指導を取り入れている教科担当者を皮切りに、中学校の参加をより進めていく必要がある。
- 町校長会の秋田県東成瀬村の視察研修に部員も同行、研修し、授業終末における「ふりかえり」の学習活動を各校で共通実践するきっかけになった。

幼小連携部

- 町内保幼小連携のキーワード「自主性」と「思いやり」を共通テーマに実践活動を進め、学び合うことで、相互理解や連携が深まっている。
- 幼小連携の先進園である 三川町立幼稚園長 齋藤雅志氏の講話「幼小連携で大事にしたいこと」をもとに、連携のポイントについて共通理解を深め、実践の充実につなげた。

小中連携部

- 鶴岡市立朝日中学校教頭 土井浩貴氏を招聘し、先進的な実践を進めている朝日地区の小中連携について研修。今後の立川・余目両地区の交流・連携活動推進の具体的な視点を得ることができた。
- 「小6・中1・中2連携プロジェクト」に関わり、中1生徒を対象にアンケートを実施。小6～中学校進学後の中学校に対する意識の変容と生徒の実態を把握し、今後小中で配慮・充実すべき点等を具体的に捉えることができた。
- 町内小中一貫教育推進の視点から実践の検証や普及策の検討を進めてきたが、「立川SD（スタンダード）」「余目AA（アソシエーション）」共に中学校区毎に交流・実践を充実させていく段階に入ったとして、当部の活動については一旦停止する見通しである。

児童会・生徒会活動研究部

※「1 子ども一人ひとりを育む学びづくり」の「児童会・生徒会自治活動の推進」に記載

特別支援研究部

- 「特別支援教育を活かした保育・授業づくり」「生活単元学習並びに自立活動の充実」をテーマに、3回の研修会を企画・実施。
- 課題別研修会では、卒業生が就労している町内の就労施設、社会福祉施設、作業所、事業所等を訪問・視察し、仕事の実際や卒業生の状況を把握するとともに、現在担当している子どもたちの特性に応じた具体的な進路指導や、幼少時から育てていくべき力等について研修を深める機会となった。
- 「校内における特別支援教育コーディネーターの職務の活性化と学校支援体制の充実」に向けた研修を、計画的・継続的に進めていく必要がある。

情報教育部

- 情報教育に関わる教員の資質向上を図ることを重点課題とし、機器活用と情報モラル教育の推進の2つの観点から研修を積み上げている。

○情報機器活用の実技研修として、鶴岡一中 南波純 教諭を講師に、デジタル教科書・教材の活用について研修。実際に体験し、その利便性や必要性を認識した教員が多く、購入を望む声が多くあがった。併せて、デジタル教科書の効果的な使い方を今後の研修の中心としていく計画も検討されている。

○情報モラル研修会の開催。

・余目一小6年生の授業「ネット社会を生きる」(本間紳一教諭)を参観。ソフト「ネット社会を生きる」を活用した実際の指導場面をもとに、情報モラル教育の指導の在り方を具体的に捉えることができた。ソフトは各校に配信されており、いっそうの活用を図りたい。

・町生徒指導主任研修会との合同でネットトラブル研修会を開催。以前山形県サイバーパトロールを担当し、現在は酒田警察署に配属されている川崎健司氏を講師に迎え、「ネットトラブルの現状と情報モラル教育の授業づくり」について研修。所員の全員研修或いは各校での親子研修等への拡大を図りたい。

○7月31日を全町内「学校閉庁日」とし、全職員の終日研修日として位置づけ、研修参加を保障している。教育講演会、課題別研修会を開催、その後に所員交流会を実施。

<町教育研修所課題別研修会>

○所員の研修希望をアンケート調査し、研修所の重点等とすり合わせながら、希望の多い内容を中心に企画。所員のニーズに対応した研修意欲の高い講座となっている。

- ・合唱・学級経営講座…「合唱づくりは学級づくり～合唱を通してクラスを育てる～」
- ・町内めぐり講座…町初任者研修を兼ねて開催。「余目地域を知ろう～乗慶寺・マルハチ・舟つなぎ・亀ノ尾資料館～」(5月に立川地域コースを実施)・報教育講座…「デジタル教科書を覗いてみよう!」「ネットいじめと不登校」・特別支援教育講座…「事業所見学から学ぶ～ひまわり園・ハナブサ醤油・みなみ～」
- ・体育実技講座…「ヒップホップ」
- ・研修講座…課題を抱える子と保護者への対応について」
- ・学校事務部会…「事務処理データの共有作業」
- ・業務員・調理員部会…服務研修、学校給食施設管理研修等

<町教育研修所教育講演会>

演題：「なんのために？ 出会いを生かせば道は開ける！」

講師： クロフネカンパニー代表取締役社長 中村文昭 氏

(2) より質の高い学級・教科担任力の育成

○年2回「担任力向上研修会」を開催。教員の課題やニーズに対応し内容が工夫され、各校の授業改善・向上につながる継続的な研修の機会となっている。

(第1回研修会)

テーマ：「体験・発見をとおして楽しくわかる算数・数学の授業づくり」

- ・立川小2年生(笹原志穂教諭)の提案授業
- ・数学教育実践研究会(小金井市立第三小学校教諭)森川みや子氏による模範授業と公演

(第2回研修会)

テーマ：「全員がわかる楽しい授業づくり～ユニバーサルデザインの視点から～」

- ・筑波大附属小学校教諭 桂 聖 氏による教員を生徒に見立てた模擬授業と講演

10 学校教育施策・事業の総括

- (1) 計画訪問と年度末経営訪問、教職員アンケート等により、各校・園の経営や実践を具体的に把握し、成果と課題を総括しながら次年度の指導戦略を構築している。次年度の「重点と視座」に反映させ、各園・学校への周知を図っている。庄内町教委が推し進めてきた「学校経営マネジメント」のPDCAシステムを、教委自ら実践し、範を示していると言えよう。
- (2) 教育長の熱いリーダーシップのもと、新しい時代の教育や地方創生といったマクロ的視点から教育を構想するとともに、地域の子どもや学校の実情を具体的に捉えながら、ミクロ的視点でその改善とよりよい育ちに向けた施策を構築している。その現れの一つが、「庄内町学力づくりの構想」である。庄内町の教育の「グランドデザイン」であり、これを受けて園や学校、社会教育等が自らの進むべき方向性（目標）と実践戦略を明らかにしていくことが求められている。
- (3) 教育委員会内部の「教育課」と「社会教育課」の連携が進み、日常的な話し合いや情報交換の機会が増え、「花いっぱい運動」など共同的な事業が企画・推進されるようになってきた。
- (4) 「ネットいじめ」や「ネットトラブル」、「ネット依存」等の問題が加速度的に広がり、深刻化している現状がある。2012年の調査結果では、中・高生におけるネット依存の推計値は52万人にのぼっている。都市部と地方の差異は殆どないとも言われており、予防と早期の対応の重要性が指摘されているが、潜在化しがちな問題であるため、即時対応は困難である。ITテクノロジーの発展の負の側面だが、ネットの世界に何を求めてはまっていくのか、その心理的な背景を見ていく必要がある。子供の一人一人の意欲的な学びづくり、地域の風土や自然、文化に触れる豊かな体験活動、学校・家庭・地域が関わりあう教育環境づくり等々、庄内町教委が推し進めてきた教育施策にこそ、ネット問題の解決の糸口があるのではないか。学校という場でどのような教育を行い、どのような学習を保障するのか、大きな見通しと矜持を持って発信したい。

中 里 健

1 はじめに

昨年度の庄内町教育委員会社会教育事業の外部評価で、検討してほしい事項は二つであった。一つは、「生涯学習」と「社会教育活動」という理念、概念の共通理解と統一化して使うこと。二つ目は、教育委員会の教育目標、基本方針の認識の度合いに、学校教育と社会教育でズレがあったことを指摘させていただいた。

文部科学省白書に次のようにあった。生涯学習とは、家庭教育や学校教育、社会教育、個人の自学自習など、人々が生涯にわたって取り組む学習のことを指す。「誰もがいつでもどこでも」学習することができ、また、学習成果を生かすことのできる生涯学習社会の実現を目指す。そのために、つぎのような振興施策を進めるとしている。

- 「学校支援地域」や「放課後子ども教室」など地域ぐるみの子供達の教育支援活動の取り組みの支援や、地域の学習拠点である公民館や図書館の充実など社会教育の振興・家庭教育に関する学習機会の提供や相談対応などの取り組み支援
- 青少年の健全育成のための取り組みの推進・多様な学習機会の提供。・高齢社会への対応や人権教育の推進。男女共同参画社会の形成に向けた学習活動の振興など、現代的な課題への対応。

今回は、以上のような視点に立ち、地域の学習拠点である公民館や図書館、体育館、文化創造館といった、いわゆる現場別に外部評価を試みることにする。

2 みんなが学び続ける生涯学習の推進

*「庄内町生涯学習推進基本計画」に基づき、町民ひとりひとりが「いつでも、どこでも、だれでも」が学習に取り組むことができるように耐震改修、学習環境の整備を推進し、町民の学習活動の支援に努めます。

*住民主体の公民館運営の在り方については、社会教育と地域づくりの融合を図り、公民館事業の交付金化の定着と積極的活用を行いながら、町民の参画と協働を進めます。

上記二点の観点から、各公民館、各施設の事業を検討してみる。

余目第一公民館

- ・公民館年間最大のイベントといってもいい町民運動会、1089人の参加を数え、部落ごと、あるいは隣人同士の、あるいは家族の絆を深め、一生住みたい町を直に感じる一日を過ごしているのだろう。エンジョイチャレンジャーのボランティア活動に注目する。
- ・ひまわりっ子広場、親子DE楽笑くらぶ、いきいきアドベンチャークラブ、歴史探険郷土知り隊、少年教室、等、年間通した、こうした活動は、学習機会の提供と趣味を広げる、健康づくり、親睦を深めるなどに有効な事業と思われる。
- ・おとな映画会（年3回、平均60人）、子供映画会（年間6回、平均100人）と好評な鑑賞会を展開している。

- ・かがり火祭り、グランドゴルフ大会、部落対抗駅伝大会、芸術祭ステージ発表など大きな事業で大きな成果をあげている。

余目第二公民館

- ・町民大学陶芸学部年6回、陶芸講座年6回、楽焼き事業は伝統的に行われてきて、第二公民館の文化になりつつある。
- ・毎日練習してきた応援合戦、気持ちも合わせてムカデ競争、綱引き、楽しい親子競技など、1005人が参加した運動会では第二学区の住民が一致団結してひとつになりました。
- ・社会教育推進委員会議、自治会長会、部公連、育成会等による地域づくり会議が話し合いの場を年間数回開催していることは、他にあまり見られない。
- ・高齢者とJYA元気っ子クラブによるGG交流会、第二公民館祭、わくわく親子塾、創作活動作品展示会120点出品、等、特徴ある事業が生き活きと展開されている。

余目第三公民館

- ・1200人も参加した大町民運動会、何と言っても住民が熱中し、親子ゲーム、百足競争、部落対抗リレー、綱引き、そして、応援合戦に展開される人々の絆の姿、地域づくり、人づくりの根本がみられる公民館最大のイベントです。
- ・Word入門、Excel入門講座、パソコン活用講座、町民大学情報技術学部5回、PCマクロ講座、PCシェイプアート講座、PC基礎講座、パソコン操作等、これら第三公民館の主要事業になっている。コンピュータ文化を担当する公民館になった。
- ・こうみんかんランド、ひまわりっ子広場、ワイワイ広場など親子を対象とした事業が目立つ。子育てサポート、幼児教育、青少年育成などの観点から意識的に展開しているのだろう。

余目第四公民館

- ・町民大学歴史民俗学部・・・山形市、酒田市城輪柵視察、杉沢比山見学など、和合は歴史に学ぶ里として定着しつつある。即日定員いっぱいまで断られた人も出た。
- ・亀ノ尾の里資料館では、田おこしから田植え、そして稲刈り、ひけし作業まで年間の仕事としての昔の農作業の様子を再現して展示して見せた。町内外から多数の見学者が訪れた。
- ・おやこ元気塾(11組)、和合大学院(65歳以上27人)とカレッジWAGO(19人)和合の里ふれあい交流事業など異年齢とのコミュニケーションを意図したGG大会や登山やざっこしめといった事業が見られた。
- ・隔月発行の地域情報誌「和合」・・・和合の地藏様、和合ってどんなところ、おつきぐなったの一、亀治からのメッセージ、健康レシピなど継続掲載記事があり、零歳児から高齢者まで、歴史の語り手、農業の語り手、学校の先生など毎回いろんな人びとが登場し、読み応えがあり、綴っておけば貴重な資料集となる。和合のことがよくわかる。

歴史民俗資料館

- ・楯山にあり、7月8月の開館、来館できず残念。もう少しPRを。

狩川公民館

- ・6月1日の狩川地区町民レクリエーション大会は、さすがに旧立川町1200人参加となった。集落対抗、立小親子種目など老若男女、幼児まで、競技種目に楽しんで、暫らくぶりで再会したり、人と人との繋がりを確かめ集落の意識を高めたり、住民相互の結合を深める大切な役割を果たしている。
- ・狩川松寿大学（60歳以上、76人）・・・講演会（正木尚文氏）映画鑑賞、清河八郎講演会（廣田幸記氏）、軽スポーツ大会など、年間8回開催された。内容的に、これでよかったか、参加者にご意見を聞いてみる必要があるそう。
- ・狩川地区部落公民館連絡協議会GG交流大会、立川小相撲大会、ソフトバレー大会などスポーツ大会にも力を入れている。
- ・ワンパク学園、やまゆりスクール、風っ子広場など青少年健全育成を念頭においた子ども対象の事業も多く実施している。
- ・六月のさつき展示会、狩川地区展など文化展も盛んに行われた。

清川公民館

- ・清川松寿大学（60歳以上、43人）・・・町外施設見学（加茂水族館、さくらんぼ狩り）映画鑑賞、清河八郎とお蓮、カラオケ大会、レクリエーション大会、映画（ふしぎな岬の物語）など、8人ほどの運営委員がおり、何回か委員会を開き、内容企画を検討していると思われるが、多くの参加者の意見、要望をよく集めて検討したい。
- ・町民大学楽焼学部・・・名前は立派だが、参加者が7名と少ない。抹茶茶碗づくりが内容であるが、関心、興味がなかったのだろうか。
- ・やまびこ学園7月31日スタート（子ども25人大人16人）・・・歴史民俗資料館見学、秋のものづくり教室、清川未来マップ作り、加茂水族館見学、クリスマス会、雪あそび、など2月まで6回開催、2回目から大人の参加は1～2人、内容検討必要ある。
- ・清川ライフアップセミナー・・・健康体操、カルトナーージュ作り、ススキでフクロウづくり、フラワーアレンジメント、巻きずしづくりなど、年間7回開催、平均12人参加
- ・立川スキー大会（1月18日、64人）・・・羽黒山スキー場にて、悪天候の中、最後まで頑張って滑ったそうです。
- ・雪灯籠まつり・・・2月7日、清川グラウンドに2000本のろうそくが灯され、綺麗で幻想的な雰囲気的情景が見られたという。

立谷沢公民館

- ・町民大学自然学部（3回、8～12人）・・・野鳥観察（酒田十二滝、瀬場、酒田溜池）
- ・松寿大学（12人）・・・町内見学、防災セミナー、秋を満喫しよう、入浴事故防止
- ・立谷沢地区GG大会（18人）
- ・立谷沢夏祭り（56人）・・・子どもたちの売店、レクリエーション大会など
- ・清流の里秋祭り（300人）・・・スター誕生ONステージ、うまいものフェア、ピッツァを作ろう
上記は活力ある地域づくり推進事業として進められている。
- ・立谷沢悠遊塾チチカカコ・・・映写会（57人）、夏祭り参加、クリスマス会（51人）、雪あそびなど
- ・W a c h a - c l u b 9月スタート（子供13人）・・・絵づけ・うどん体験、社会科見

学3回開催

- ・立谷沢和太鼓クラブ・・・夏祭り、庄内町音楽祭、たちかわ秋祭り、鶴岡和太鼓フェスティバルなどに出演

以上の3事業は青少年健全育成のために展開している。

- ・家庭教育の充実のために、だっこちゃん広場やにこにこファミリーセミナーを開催している。

庄内町中央公民館

- ・家庭教育事業・・・演歌で考える孫育て（105人）、町PTA連合研修会（食育）（133人）、祖父母の役割（59人）、幼児教育（23人）、幼稚園保護者研修（食育）50人、「Tomorrow明日に向かって」余目中（469人）、狩川幼稚園保護者研修会（66人）、余目第2、3幼稚園保護者研修会（134人）、「リフレーミング共育」（75人）、など、それぞれの対象者を配慮し、適切なテーマで実施されている。
- ・栄寿大学・・・歴史の里清川散策（15人）、講話「いきいきと年齢を重ねるために」、「だがしや楽校」、町内各施設見学、そば打ち体験（16人）、町長講話など、町民全体を対象にしている事業だとしたら、予測している参加人数なのか。大学生が少なすぎないか。
- ・青少年ボランティアスキルアップ講座7人、5人、家庭教育・子育て支援スキルアップ講座14人、17人など、それぞれ年間2回ほど事業として見られますが、参加者が振るわないのはどうしてなのか。予定通りなのか。

3 地域に根ざした文化の振興

*多様化する文化芸術活動の町民ニーズに応えるために、関係諸団体と連携を図りながら、文化創造館「響ホール」を拠点に、文化の発信や交流人口の拡大、鑑賞機会の提供、人材の育成に努めます。

*「庄内町文化創造タウン構想実施計画」をもとに、町民が主体的・創造的に文化芸術活動に親しめるよう環境づくりを推進し、文化の薫りが高い町づくりを目指すとともに、文化の森整備事業の検討を進めます。

*町立図書館の資料の充実を図りながら、より良い読書環境づくり、利用者へのサービス向上に努めます。また、本が好きな子どもの育成をめざし、「庄内町子ども読書活動推進計画(第二次)」を各機関と連携を図り推進します。

庄内町文化創造館

・自主事業

- ①海上自衛隊東京音楽隊庄内演奏会（625人）
 - ②真夏のひびき寄席三人囃（531人）
 - ③加藤登紀子コンサート（503人）
 - ④沖仁&渡部香津美ギターデュオ（307人）
 - ⑤寺内タケシとブルージーンズスーパーライブ（417人）
 - ⑥沢田知可子クリスマスライブ（283人）
 - ⑦1966カルテット（148人）
- など、町民の各年代層や種々の芸術を考慮した内容になっているが、若干、音楽に片寄った傾向がある。

- ・指定管理者制度の導入に向けての検討を、平成24年度から検討委員会を組織し協議し

ているが、その結果が待たれるところである。

・第10回庄内町芸術祭開幕式典・開幕記念事業（455人）

・内藤秀因記念水彩画公募展

・響ホール事業推進協議会育成団体発表会（2月8日、384人）

以上の事業を考えてみても、町民の文化芸術活動は多様である。そのすべてに対応するのは困難であるが、鶴岡酒田に劣らず、立派な施設をかかえ、町内はもとより、町外にも拡大して最大限の利用に努めているようにみえる。

庄内町立図書館

・町民大学文学部・・・ふるさとの昔話や伝承文化を学ぶ講話（12人）、2回目12人、ダシ風物語記念館（11人）、4回目9人

・読み聞かせ講座・・・おはなしらんどポップコーンのお話会年間8回・つちだよしはるさんワークショップ・・・絵本原画展も・絵本等団体貸出事業・・・幼稚園、保育園、子育て支援センターなどへ

・小学校へ本の貸出事業・・・5小学校と学童施設4か所へ

4 健康と生きがいを支えるスポーツの推進

*生涯各時期に適応したスポーツ・リクレーション活動を通じて、健康、体力の保持増進を図ると共に、指導者の育成と資質の向上を図り、生涯スポーツの推進に努めます。

*競技力向上と競技人口の拡大を図るため、関係諸団体と連携を密にしながら、競技スポーツの推進に努めます。

*学校、地域及び関係諸団体と連携を図りながら、スポーツ環境を整備するとともに、庄内町総合型スポーツクラブを側面から支援します。

総合体育館

・八幡スポーツ公園竣工一周年記念行事（6月29日、400人）・・・サッカー教室、ソフトボール教室、余目中と立川中ソフトボール交歓試合、施設の概要説明など

・町民体力運動能力調査（20人参加）

・第17回山形県ジュニア駅伝競走大会及び第39回蔵王坊平クロスカントリー大会参加、8月3日

・庄内町スポーツ少年団大会（407人参加）

・トレーニングルーム利用者講習会（9人参加、10月22人参加）

・庄内町ひまわりマラソン2014（702人参加）・・・親子ペア、小学生低、中、高学年、オープン3、5、10キロ、

・平成26年度社会体育施設利用団体調整会議、代表者29人参加

・庄内町スポーツ推進委員協議会（年6回開催、平均18人参加）

・スポレク in 庄内2014（86人参加）・・・目をつぶって片足立ち、スリッパ飛ばし、吹き矢、ストラックアウト、PK合戦、輪投げ、フライングディスク、ラダーゲッター、ソフトボール大会など

・八幡スポーツ公園一周年記念GG大会（200人参加）

・庄内町スポーツ少年団本部及び中学校地域指導者合同研修会（58人参加）

- ・庄内町体育協会表彰式並びに懇談会（150人参加）
- ・平成26年度庄内町スポーツ少年団リーダー研修会（金峰少年自然の家、108人参加）
講話、創作活動、リクレーションなど

庄内町は、総合体育館、八幡運動公園、ほたるドーム、各公民館の体育館、各地区のゲートボール、グランドゴルフ場、各小学校の体育館、グランドなど、町民のニーズに応え、より多くの人に楽しくスポーツに親しんでもらえる施設環境が他町村に比べても非常に恵まれている。そこで活動する町民の姿は、年齢を感じさせず、幸せそうに、喜びを全身に表現していた。今後、町民が安全で安心して利用できる管理体制を整備し、耐震改修など安全点検にも重点化して努めていきたいものです。

5 おわりに

（1）庄内町総合計画の具現化

今年度の外部評価は、アトランダムだが各施設ごとの主要事業を検討させていただいた。庄内町総合計画に掲げる「自然はみんなのエネルギーいきいき元気な田園タウン」「生きがいつくり、人づくり、オンリーワンのまちづくり」の具現化に向けた、領域の広い事業の展開がなされている。しかも、大きな結果を残しているものが多い。（参考資料として、各機関の月ごとの事業報告書、各公民館の機関誌）

（2）今後の公民館について

文部科学省は「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月）で次のように述べている。「社会が人を育み、人が社会をつくる」好循環システムを構築するに当たって、公民館を学校と並ぶ地域コミュニティの拠点として位置付けており、多様な人が集い、学習するなどを通じてネットワークを構築し、特色のある地域づくりを行うことにより、社会教育を活性化し、地域の絆・地域コミュニティを作り上げていくという役割が一層期待されています。

庄内町でも、住民主体の公民館をめざし、社会教育と地域づくりの融合を図り、公民館事業の交付金化の定着と積極的活用を行いながら、町民の参画と協働を進めます。として、このことに基づいて、各公民館では、「地域づくり」の懇談を、積極的に数回にわたって開催しているのが注目される。「自分たちでできることは自分たちでやろう」という自覚とともに、安全安心、環境美化、地域福祉、健康づくり、子ども支援などの地域課題を考えると、教育委員会だけでなく町長部局とともに、行政全体での対応を検討する時期にきている。それが地域づくりを考える公民館ではなかろうか。

（3）庄内町教育振興基本計画

庄内町にとって初となる教育振興基本計画の策定に向けて、現在各関係機関が協議・構築していると聞く。将来の庄内町の教育の姿を、その構想に期待したい。